

～車窓を楽しめない鉄道の旅～
名古屋の環状線 地下鉄名城線を右回りで一周

名古屋へは出張で何回も行ったことがあるし、退職後も個人的な旅で何度か訪れているが、地下鉄の路線図がなかなか頭に入らない。東京や大阪と同じように名古屋の市内には環状鉄道が走っているが地下鉄であることが特徴。ところが、名古屋の玄関口であるJR名古屋駅はこの都心部の中心をなす環状線は含まれていない。などなど、こんなことが余所者には理解しにくい点なのかもしれない。

そんなことを思いながら地図を眺めてみたら、「もしかすると名古屋の町作りの経緯がわかっていないことも背景にあるのではないか」とも思い始めた。

そんなこんなで、二つのテーマが浮かび上がってきた。「名古屋の町の歴史を少し勉強してみよう」そして「名古屋の環状線市営地下鉄名城線に乗ってみよう」。

< 1 > 名古屋城の起源

1500年代に駿河国を治める今川氏親が尾張への進出を企てて、その拠点として作った柳の丸（現名古屋城二の丸の場所）が名古屋城の前身である那古屋城の起源と言われている。

1532年（天正元年）に織田信秀が時の城主今川氏豊を尋ねた折、奇策でこの城を奪い取り、那古屋城と名付けた。後に信秀は古渡（ふるわたり）城に移り、この城を嫡男である信長に託した。

1555年（弘治元年）信長は清須城に拠点を移し、那古屋城は廃城になった。

豊臣秀吉没後、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は大阪の豊臣方を封じ込める為の作戦に出て、東海道の一重大防衛線として尾張の国の整備に着手。そして尾張の拠点を清須城から那古屋城に移すことにした。

1612年（慶長12年）天守閣が完成、引き続き城下町の整備が行われ、清須から名古屋への移転が行われ尾張の遷都が終った。江戸幕府がスタートしたのは1603年なので、時間的な長さも考えるとこのプロジェクトの大きさが感じられる。

かくして名古屋に城下町が作られたのだが、明治に入り鉄道が登場し、やがて戦火に見舞われて、様々な変異を経て今日につながるわけである。

< 2 > 鉄道が出る前の名古屋

鉄道が出ると鉄道を中心とした町が見えてきてしまう。鉄道は近代になってからできたものなので、現在の地図から鉄道を削除してみると少し時代を遡ることができるのではないかと、そんな地図を作ってみた。

水路を掘削して庄内川から引いた水が堀川となって海に注ぐばかりか、名古屋の町の中を潤していたような感じが見えてきた。現在高速道路が走っているが、昔は川だった所も多々有り、水路・水運の姿も想像することが出来る。

また、南側にある熱田神宮の西及び南西側は海で、西側の桑名へ海上七里の渡しがあつた。熱田は交通の要衝としてかなり繁華な所だったに違い



ない。その水路を利用して堀に囲まれた名古屋城。城の南側に碁盤の目のように作られた町。

横軸は外堀通から南へ、京町通、上中通、魚の棚通、杉の町通、桜通、伝馬町（てんま）通、袋町通、本重町通、錦通、広小路通、入江町通、三蔵通、白川通、矢場町通、若宮大通・・・。

若宮大通より南側はやや碁盤の目に歪みがある。

縦軸は久屋大通から西へ、大津通、伊勢町通、呉服町通、七間町通、本町通、長者町通、長島町通、桑名町通、伏見通、御園通、中の町通、木挽町通と並び堀川にぶつかる。

名古屋城を中心に形成された町、東海道を旅する人の中で伊勢に渡る人で賑わった熱田の町などなど、いくらか見えてきた。

< 3 > 鉄道が登場した



明治政府が東の京と西の京をつなぐ鉄道路線の計画を始めた頃、東海道ルートよりも中山道ルートの方が優勢だったらしい。明治 16 年、山県有朋の「東海道は艦砲射撃を受ける可能性あり」との声で、中山道ルートが確定し、翌明治 17 年には高崎・横川間及び岐阜・加納間で工事が始まった。つまり、鉄道は名古屋を通らないということになった。

ところが、時の名古屋区長は藩政時代に木曾の山中の役人をしていて関係で、中山道ルートの難しさを感じていてこれを中央に訴え出た。そんな経緯を経て、明治 19 年に「幹線鉄道は東海道経由」と確定した。

当初の鉄道省の計画では名古屋駅は「現在の熱田の伝馬町（てんまちょう）」に作ることにしていたが、名古屋区長の強い提案により、「笹島に名古屋駅を作り、広小路を西へ延伸して幹線道路を確保する」となった。

その後、濃尾地震に襲われて駅舎は倒壊、約 200m 北の現在の位置に改めて作り直された。そして町と駅をつなぐもう一つの道路として桜通も確保された。そして、堀川以西にも新しい町が作られて、旧城下町とをつなげた「大名古屋」ができあがった。

鉄道路線はその後充実の一途をたどり、官民両面から鉄道路線の 신설・延伸が進み、現代に至っている。

< 4 > 環状地下鉄 名城線

古い町を壊さずに新しい町と古い町を結んだ大きな町を作るために、知恵を絞ったと思われる。そのひとつの成果として「地下鉄路線の拡充」が進められ、2005 年の「愛・地球博（名古屋万博）」に合わせて、2004 年に市営地下鉄名城線が開通し、地下鉄としては初めての 26.4Km の環状路線が実現した。

町が大きくふくらむ過程で、東に広がっていくことになり、東西の鉄道路線の他に、点在する様々な拠点を結ぶ交通の確保も必要になり環状鉄道の実現につながったと想像する。

よその土地から名古屋を訪れる人は鉄道を利用することが多い。名古屋駅に降り立った旅人は、名古屋の町の形に戸惑い、地下鉄を中心とした交通機関の理解に苦しむ。

名古屋駅から乗ることが出来る地下鉄は桜通線と東山線だが、いずれも東西に走っている。その先に名城線という環状線が走っており、環状線の外にある名古屋駅は「町の中心ではない」と錯覚してしまう。

余所者にとって、名古屋駅から乗ることが出来る桜通線と東山線には馴染みは濃いですが、名城線とはどうも馴

染みが薄いのが実情のようである。



そんなわけで、何度も名古屋の町を訪れてはいるものの、未だに地下鉄路線特に名城線が頭に入っていない自分を恥じて、名城線を右回りで一周して体で感じてみようと思いついた。

地下鉄なので車窓からの景色は何も見ることには出来ない。地上の地図を片手に、地上の景色を思い浮かべながら走るという、

「車窓を楽しめない鉄道の旅」。

名古屋から東山線で栄まで行き、この旅はスタート。

◆**栄(さかえ)**：という地名は新しそうに見えるが、実は古くから有るものらしい。

名古屋から名鉄で北へ一駅進むと「栄生(さこう)」という駅があるが、昔は愛知郡中村字栄(さこ)と言ひ、後に栄村になった。栄村から名古屋の城下町へ出店を出して商売をする者があって、栄という地名が誕生したと言われている。「栄生(さこう)」という駅名になってはいるが、地名としては「栄生(さこ)」が正しいらしい。

「さこ」とは狭いところを意味する言葉で「せこ(瀬古)」なども

同意語とのことで、おそらく将来栄えるようにとの願いを込めて、「栄(さかえ)」と転じたようだ。

◆**久屋大通(ひさやおおどおり)**：尾張徳川藩初代藩主徳川義直が「久しく繁盛する」ことを願って久屋町という町の名を付けたのが由来。太平洋戦争で、米軍の空襲を受けて名古屋は壊滅的な打撃を受けたが、その復興に際して「災害に強い町作り」として、延焼を防ぐ目的での100m道路が作られ、久屋大通と名付けられた。

◆**市役所**：外堀通りより城内に入り、出来町通と大津通の交差点に愛知県庁と名古屋市役所がある。名古屋城二の丸公園の角にあり、様々な役所や公的な機能が集まり愛知県の心臓部(脳部?)に当たる場所になっている。中区を離れて北区に入ると、やや右にカーブして大津通から少し東側に離れるようになる。

◆**名城公園**：城北住宅の団地の中にあり、公園は大津通を挟んで西側になる。堀川の下をくぐり抜けた後直角に曲がり東に向きを変えると環状線と言う名の付いた道路の下を走るようになり

◆**黒川**：堀川は開削した黒川某の名にちなみ、別名を黒川と言うらしい。黒川駅を出ると再び堀川を潜り

◆**志賀本通**：地名の正しい読みは「しがほんとおおり」だったが、「しがほんどおり」。志賀と言う地名の起源はこの辺りは海に面していることから、湿地を示す「湿(しる)き」、場所を示す「か」であろうと言われているが、一方では「海の皺(しわ)」という説もありいずれも定説にはなっていない様子。

名城線は環状線（県道 15 号）の下を東へ走り、南東に向きを変え始めるところが平安通駅。

◆**平安通**：何やら古い時代を感じさせる地名だが、事前事後の調べで由来は何だかわからなかった。北に進む地下鉄上飯田線の起点駅でもある。名鉄小牧線と乗り入れをして犬山まで直通運転をしている。

◆**大曽根（おおそね）**：「おおそね」と読むものと思っていたら、何と「おおぞね」だったので、びっくり。「そ」は「洲・須・砂」を意味し、「ね」は「根・峰（周りより高いところ）」を意味する。全国に存在する「曽根」が付く地名は「川沿いのやや高い所」を意味し、共通しているらしい。現在は中央本線が矢田川を渡って名古屋に入る入口に位置するが、その昔は木曽路（中山道）の最初の宿場町だった。この駅の中が区の境界になっていて、プラットホームの後方は北区、前方は東区に属する。

◆**ナゴヤドーム前矢田（やだ）**：長ったらしい上に何とも間抜けな駅名の感じがする。矢田（やだ）という地名の起りは「谷津（やつ）・谷戸（やと）」などと同じと言われており、谷間の湿地を意味する。矢田川という川もあり、地形が元でできた地名と考えられる。その名の通り、駅の南側に名古屋ドーム球場がある。大曽根から東南東に一直線に走ってきた名城線が、北側を並走する矢田川に最も接近するのが

◆**砂田橋（すなだばし）**：大幸川にかかる砂田橋が駅名の由来らしいが、大幸川は道路下の暗渠となってしまう砂田橋は残っていない。「砂田」という地名の起源は矢田川が運んでくる土砂が積み重なった地形から来ているような気がする。香流川（かなれがわ）、天神川を合せて大きな流れになった矢田川が少し湾曲する所が砂田で、苗代・石原・菱池・雨池・脇田・汁谷・・・、矢田川の流域にある地名を拾ってみると限りなく想像の環が広がってくる。地図を見ると、名古屋大学・名古屋高校から愛知教育大学付属小学校・幼稚園まで、様々な学校が集まる文教地区のような感じがする。砂田橋を出た名城線は徐々に南東に向きを変えながら東区を出て千種区に入る。

◆**茶屋ケ坂（ちゃやがさか）**：出来町通と交差するところに駅がある。聴いただけでワクワクする面白そうな地名だ。江戸時代に山口街道の坂道に一軒の茶屋があったことに由来する地名とのこと。山口街道は、江戸時代に天領の地を幕府の役人（巡見使）が視察する道で、出来町通と中山道（国道 19 号線）の交差点に山口町という地名が残っている。国土地理院の地形図を見ると、出来町通の途中で茶屋ケ坂通と表示があり、駅の南側に連なる海拔 50m ほどの丘陵地帯を更に南へ辿ると气象台がある海拔 65m の山に繋がっている。

◆**自由ヶ丘**：茶屋ケ坂公園の下をくぐり抜けながら少しずつ南に進路を変えていき、奥深い由来が潜む駅が二つ続いた後は現代的な地名の駅になった。昭和 30 年に公募で付けた町の名前らしいが・・・。

◆**本山（もとやま）**：自由ヶ丘から南へ比較的駅間の長い区間を走ると、広小路通（地下鉄東山線）と交差するのが本山。地名から高台や山の上を想像するが、本山は東山の西側の麓にある。駅名と交差点名は「もとやま」だが、町の名前は「ほんやまちょう」と言う。

◆**名古屋大学**：本山から南東へわずか、東山動物園の西側に広がるのが名古屋大学東山キャンパス。その中央部に駅があり、学生に限らず大学関係者にとっても贅沢この上ない交通環境だ。構内を出ると昭和区。

◆**八事日赤（やごとにつせき）**：大学を後にすると南山大学の東側を南へ走り、名古屋第二赤十字病院の門前に停まる。八事という地名については次の駅で触れることにする。やがて進路を南西に変えると

◆**八事（やごと）**：「岩（や）」が「凝（ご）る」、すなわち固い岩盤の岩山である八事山に由来するもの。東山公園から連なる稜線の先にある八事霊園には 61.4m の三角点があり、八事駅の北側にある興正寺は海拔 60m 弱、敷地の中に固い岩盤の片鱗が見られるとのこと。八事駅を出ると一瞬だけ天白区を走るが、すぐに瑞穂区に入り、さらに南西に走り続ける。

◆**総合リハビリセンター**：名古屋市総合リハビリテーションの下に駅がある。

◆**瑞穂運動場東**：その名の通り、名古屋市のスポーツの殿堂である瑞穂運動場の東側に位置し、運動場の西側には桜通線の瑞穂運動場西駅がある。瑞穂陸上競技場は著名な陸上競技の大会でしばしば使われたので、全国的にも有名である。2026 年アジア大会のメインスタジアムとして使う計画があるらしい。

◆**新瑞橋（あらたまばし）**：東山線と交差する駅で、山崎川の北岸に駅がある。おそらく山崎川に架かる橋の名前が駅名になったのだろうと思うが、「新瑞（あらたま）」という、あまり一般的と思えない読みにしたのは何故だろう。

◆**妙音通（みょうおんどおり）**：治承 3 年（1179 年）平清盛により流刑にされた藤原師長がこの地（井戸田）

に暮らしていた。師長は琵琶を弾き花鳥風月を楽しんでいた。地名の由来は、師長の法名「妙音院」から。

◆**堀田(ほりた)**：新瑞橋から西へ真っ直ぐ進み、高速道路を横切るところに駅がある。名鉄堀田駅は東海道を北へ少し進んだところにあるが、乗換えられるようにはなっていない。低い土地で雨が降ると田圃が堀のようになったことから堀田の地名が付いたという説と、低い土地をさらに掘り下げて田圃を作っていたからという説が見つかった。どちらにしても、低地・湿地であったことは間違いないようだ。駅の所在地が瑞穂区苗代町なので、環境は手に取るようによくわかる。

◆**伝馬町(てんまちょう)**：熱田区に入り最初の駅で、熱田神宮の南端で堀川と新堀川の合流点のやや上流に位置する。伝馬町という町は海拔 1m 台の低地で、新堀川の対岸の内田橋・浮島町あたりはさらに低く、海拔 1m にも満たない。昔は熱田神宮の先は海で、桑名へ渡る船着き場があった。江戸時代の人や物の流れ及び情報通信網の中核をなした伝馬役が住む町として、伝馬町(でんまちょう)・伝馬町(てんまちょう)は各地に存在する。熱田神宮を右手に見てぐるっと囲むようにまわり北に向きを変えると神宮の北西の角の

◆**神宮西**：地図を眺めると、お寺が多いのが目立った。熱田神宮で使う衣装の機織りをしていたという旗屋町、熱田神宮の大宮司の屋敷にあった湧き水が由来の玉の井、その昔静かな別荘地だった時代もあった夜寒町など目を引く町名が並び、古墳もある。駅名は味気ないが、降りて歩いて見たくなるような所だ。

◆**西高蔵(にしとかくら)**：堀川に沿って伏見通りの下を北北西に向かって行くと西高蔵。この駅の住所は熱田区五本松町、地名の由来は高座結御子神社(たかくらむすびみこじんじゃ)、創建時期不詳と言われてはいるが、天武天皇の時代(600年代後半)に熱田神宮とほぼ同時期に作られた境外摂社で熱田神宮と同じ尾張の祖神を祀る鎮守神・産土神。駅の東側にあり、境内は緑に包まれた高蔵公園となっている。

◆**金山**：中央本線と東海道本線が合流する駅。駅の南口、八熊通りにある金山神社が駅名(地名)の由来。800年代に熱田神宮の鍛冶職人(尾崎善光)が自分の屋敷に祀ったのが始まりで、鍛冶職人たちが金山彦命を祀った。

◆**東別院**：金山駅を出ると北北東に進路をとり、山王通との交差点に東別院駅がある。山王通の北側に東本願寺別院があることでこの駅名が付いた。正式な呼称は「真宗大谷派名古屋別院」と言うが略して表現するのが好きな名古屋人は「お東さんの別院」を「東別院」としてしまった。元禄3年(1690年)尾張藩の二代目藩主徳川光友から、信長の居城だった古渡(ふるわたり)城跡地の寄進を受けて「名古屋御坊」として建立された。

◆**上前津(かみまえつ)**：前津通りの下を北北東に進み、大須通を走る鶴舞線と交差するのが上前津駅。「前津」という地名は、目の前が船着き場だったことから付いたという説が有力。

◆**矢場町(やばちょう)**：前津通を走っていた名城線は久屋大通に入ると矢場町。天文17年(1548年)この地に牧長義の居城として小林城ができた。その後柳生の屋敷になり、元禄14年(1701年)清浄寺となった。そして寛文8年(1668年)ここに弓矢場が置かれて、武士の武道の訓練場になった。この東側にも矢場があり、東矢場と呼ばれていた。(現在の東区)

久屋大通に入る前、若宮大通の南側で大津通を挟んだ両側に「矢場」という名を冠したマンションやビルが目立つが、ここらが昔の矢場だったと思われる。地図をくまなく探すと、大津通の西側の一角に三輪神社を囲むように小林荘やマンション XX 矢場、東側には清浄寺も見つけることが出来た。

◆**栄**：熱田区を抜けて再び中区へ。そして、久屋大通をゆっくり北上し栄駅に到着。名城線右回り一周 50 分の旅は終了した。久屋大通に出てしばし散策の後昼食をとり名古屋駅に戻った。

江戸時代前の名古屋、関ヶ原の戦い前後の名古屋、徳川家康が入ってきてからの名古屋、そして明治維新を経て、第二次世界大戦、戦後の復興……、様々な異変の中を過ごしてきた名古屋が少しばかり見えてきた。環状に走る地下鉄路線に興味を持ったのがきっかけで、色々なことがわかった。

名古屋に感謝しなければならぬそうだ。

以上